

主体的に学ぶことで獲得した力を発揮できる生徒の育成

～創造性を培う授業を目指して～（2年次）

長沼 裕樹

川口 照平

小林 早希

1 研究主題設定の理由

（1）これまでの研究から

これまでの本校の研究について振り返ってみると、平成26年度からの3年間は、『「深く考える」授業の創造』と全体研究主題が設定された。保健体育科では、授業の中に「考える」場面を多く設定することは難しいと感じていた。これは生徒同士の話し合いやアドバイスを交換する時間を多くとることで「考える」ことは可能であるが、運動量が減少してしまうという問題が出てくると考えたからである。体育学習では個人で活動する場合のほかに、ペアでの補助や教え合い、ICTの活用を含めグループで協働的に学習することも多い。その際、教え合った内容や他者の意見を、個人カードやグループノートに書かせ、自己表出の方法を工夫しながら自分たちの考えを発表するといった活動を実施し、「思考力」・「判断力」・「表現力」等の育成を図り、自分が「理解していること」や「できること」を他者に伝えたり、表現したりすることが「わかる⇔できる」につながる要因と考えた。これを実現するためには、生徒個人が課題に対する自己の見解をもち（Plan）、それを示し合ったり、表現したりすること（Do）によって共有・共感、吟味し（Check）、新たな認識の高みに至る（Action）という過程が大切になってくる。この「共有・共感、吟味」が、授業の中で数多く見られ、互いに高め合うことができるよう「問い」をもたせ、活動しながらも「考え続ける」場面を設定することで練習する（運動量の確保）ことと振り返り（「深く考える」）を効率よく設定することに重点をおいた。

研究の成果として、授業で生徒に提示する「めあて」を工夫し、課題に対して一つの答えを目指すだけでなく、答えにつながるヒントやいくつもある答えの中のどれかを見付けることができるような投げかけをしたり、全体でそれぞれの考え方を共有する場面を継続的に設定したりすることで、吟味（Check）し思考を働かせる（Action）生徒の姿を見ることができるようになった。既習事項から考え出された解決方法が最善であるのかどうかを検討するために仲間に協力してもらったり、表現して伝えたり、意見交流をしたりして、より良い解決方法を仲間と協働的に探ろうとする姿勢や学習方法が身に付いてきたこと、さらに、自分自身の考え方だけで完結するのではなく、自分自身の考え方が正しいのか、それとも他に何か良い方法があるのかと思考錯誤する生徒の姿は、これまで保健体育科が「自ら考え、主体的に取り組む体育学習」について研究してきた成果であり、視点が変わる見方からの課題に対するアプローチによって生徒は「深く考える」状態となって学習に取り組んでいたといえる。

平成29年度からの3年間は、「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成」と全体研究主題が設定され、「見方・考え方」を働かせた学びを実現するための手立てを工夫し、指導と評価の一体化を目指して実践を行った。保健体育科の資質・能力を見取る評価の在り方について吟味し、教科横断的な視点に立った教育課程の編成に取り組んだ。このように保健体育科での「学び」に対する姿勢が、授業などだけでなく日常生活にも発展し、生きる力となって発揮されることがこれからの社会で求められる力であり、保健体育科が目指す生徒の姿である。授業を通して身に付けた学び方や態度、高まった力を学校生活や実社会で発揮できる生徒の育成を目指すことこそが、新学習指導要領の方向性とも合致する。

令和2年度からの2年間では、コロナ禍の影響を受けて例年通りの学校教育が進められない状況下だったことや附属四校園の研究を関連付けて進めていくこととなった。生徒が保健体育の授業の中で「主体的に学ぶ」姿を目指しガイダンスを工夫したり、GIGAスクール構想における一人一台PCの端末を活用したり、動画撮影を授業の中に計画的に組み込み、記録や比較、分析、考察に活用することを模索してきた。効率化が図れるだけな

く、授業者が行う評価における参考資料となったり、生徒の学習（習得）した記録を残したり、どのように変化（変容）したのかを映像をもとに確認したりすることができるので、電子化した効果を確認することができた。評価方法（評価指標の作成）については、単元や授業を進めていく中で今後も検討し、研究を進めていく課題となった。昨年度からの研究では、保健体育科で育成された資質・能力が、学校生活をはじめとする日常生活で更に活用され、生徒自身に身に付くような指導ができるように、研究主題を「主体的に学ぶことで獲得した力を発揮できる生徒の育成」と設定した。

（２）本校の生徒の実態

意欲的に学習に取り組み、与えられた話し合い活動や課題に取り組む中で、授業者が求めているものは何かを考えた発言や記述が多く見られることは、保健体育の授業だけに限られたことではない。自分の意見は主張するが、他者の意見を聞いたり参考にしたりしようとする話し合いに取り組もうとする生徒は決しておおくはない。課題を見付けたり、解決しようとする意見を出したり、仲間の考えを聞こうとしたりする生徒よりも授業者に与えられた場面設定に頼っている生徒が多数存在するのが現状である。自分なりの視点をもって課題に取り組み、解決に向けた学習のプロセスが授業の課題に対してだけになってしまっていることが課題である。授業で取り組んでいる課題解決へのアプローチスキルを、日常生活でも発揮できるような働きかけが必要であると感じる。

２ 研究の方向性

（１）教科研究について（全体研究との関わり）

昨年度からの３年間の全体研究主題は、「新たな価値を創造する生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした実践を通して～」と設定した。「新たな価値を創造する生徒」という言葉の説明として「創造性に富んだ生徒」と言い換えている。ここで言う「創造性」とは、自ら課題を見出し、その課題に関わる事象について自分なりに新たな意味や考え方を見出すことで解決することである。その中で課題解決によって、自分自身や周囲の人々の人生、社会全体をより豊かに、よくすることができること（＝価値を創造する）や、これまでに得た知識や経験を結び付けたり、これまでとは異なる視点や文脈の中で捉えたりすることが必要になってくる。

保健体育科で捉える「創造性」を評価の３つの観点から考えると「知識及び技能」は、運動の合理的な実践を通して、運動、体力の必要性について理解するとともに、基本的な技能を身に付けようとする資質・能力が備わり、「思考力・判断力・表現力等」では、課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結び付け、新たな意味や考え方を見出したり試してみたりする資質・能力である。「学びに向かう力・人間性等」は、課題の解決に主体的に取り組もうとする態度であり、何回も挑戦したり試してみたりしながら改善や解決に向けて調整を試みる資質・能力である。

例えば、球技（ソフトボール）の授業で考えると「知識及び技能」はベースボール型の特性、ゲーム性やルールなどの知識と、基本的なバット操作、ボール操作、走塁、定位置での守備などの技能である。「思考力・判断力・表現力等」では、攻撃面において走者がどの塁にいて、相手の守備位置がどうなっているのかなどを考え、どこを狙って打つのか、守備面においては、打者の特徴を捉え守備位置につき、走者がどの塁にいて、打球を捕ったらどこでアウトを取るのかということなどの思考力・判断力などである。また、これらをチームの中で共有し共通理解を図りながら、ゲームを展開することができる表現力である。「学びに向かう力・人間性等」は、授業の中で習得した知識や技能を活用し、思考・判断・表現していく過程の中で自らの課題やチームの課題を見出し、仲間とともに解決策や作戦などについての話し合いを積極的に行い、粘り強く課題解決に向かっていく力である。このような力を主体的に獲得しようとするプロセスや獲得した力を様々な場面で活用し、新たな課題に挑戦する姿こそが保健体育科のねらいとする「創造性」である。

「創造性」は、変化の激しい予測困難な現代社会を子どもたちがより良く生き抜いていく上で必要不可欠な力であり、日々の授業の中で培うことができる。その「創造性」を教科の中で系統的、計画的に育成することを目指し、保健体育科が目指す生徒像を設定した。

（２）保健体育科の目指す生徒像

研究主題に沿った保健体育科の目指す生徒像を設定した。この目指す生徒像では、生徒が課題に直面した際にこれまで獲得した知識や技能、経験から最善の解決方法を考え、実践し、その結果から更に考察して新たな課題にも取り組み、よりよく解決するために粘り強くそしてあきらめず実践できる力が備わったものだと考える。

保健体育科の目指す生徒像

- 自分の課題を見出し、よりよい解決に向けて主体的に取り組める生徒
- 仲間と協働し、創造性を高め合うことができる生徒
- 課題解決に向けた取組で培った創造性を授業以外の場面でも発揮できる生徒

３ 研究２年目について

（１）研究１年目の振り返り

３年計画の１年目では、生徒が保健体育の授業の中で「主体的に学び、獲得した力を発揮する」ことができる姿を目指して研究に取り組んだ。単元計画及び授業計画、学習過程を生徒がイメージできるようにガイダンスを工夫したり、得意不得意、好き嫌いなど、様々な状況の生徒が自分自身の課題に向かって練習したり、仲間の課題解決に向けた取組に協力したりできるような授業の目標や単元のゴールを設定した。また、GIGA スクール構想における一人一台 PC の端末を活用し、動画撮影を授業の中に計画的に組み込み、記録や比較、分析、考察に活用した。学習カードを紙ベースから電子化し、生徒が持っている端末から記録したり提出したりすることが可能になったことで、従来の学習カードの提出方法が授業中、あるいは下校前に係が回収していたものが、授業中であっても帰宅後の宿題であっても記入後にネット環境さえ整っていればいつでも提出ができるようになり、授業者もいつでも確認、チェック、返却ができるようになった。効率化が図れるだけでなく、授業者が行う評価における参考資料となったり、生徒の学習（習得）した記録を残したり、どのように変化（変容）したのかを映像をもとに確認したりすることができるので、電子化した効果を再確認できた。

（２）今年度の研究の方向性

保健体育科としての「創造性」の捉え方を評価の３観点の視点から明確にし、生徒たちが「創造性」をいつどのような場面で身に付けることができ、発揮することができるのかを考える中で、そのための発問や場の設定、教材・教具を工夫することで、授業での生徒の変容や「創造性」を発揮しようとする姿を見ることができた。また、「創造性」を発揮するためにも改めて基礎的・基本的な知識・技能の習得の重要性を確認し、生徒一人ひとりの習熟度や運動能力の差が広がらず、上へと引き上げていくような指導方法、集団づくりやグループ編成が課題であるとわかった。今年度はそれらの課題に着目しながら、「創造性」の見取り方や評価について研究を進めていきたい。特に全体研究でも示されている、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を明確にすること、「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等」を育成するための手立てやそれを見取るための評価の工夫について研究を深めていけるようにしたい。

４ 研究の目的

生徒が、課題に直面した時に諦めることなく、既存の知識や経験をもとに自ら粘り強く思考し、よりよい解決

方法を模索し、仲間と吟味し合っ出たアイデアを試し、振り返るサイクルを実践することができる。また解決に近づける力を身に付け、その力を他の場面においても発揮することができるように新たな価値を創り出すこと（創造性）ができる生徒の育成を目指す。

5 研究の内容

- （１）生徒が「創造性」を発揮することができるように基礎・基本となる知識・技能の習得と課題の設定（「主体的な学び」のプロセスモデルが活用されるような授業の工夫）
- （２）ICT 機器の活用方法
- （３）獲得した力を発揮できる課題の設定と評価の方法

6 研究の具体的な内容

ア 課題解決時に参考にできる知識及び技能の習得とその活用機会の確保

「見通し」「学習活動」「振り返り」を生徒がイメージできる単元計画及び授業計画、学習過程を作成し、ガイダンスを行う。また、保健体育の授業や他の教科とも連携し身に付けた資質・能力が、日常生活でも活用されることができるような年間指導計画の作成・実施・改善（PDCA サイクル）

イ 思考・判断・表現力等を鍛える機会の設定

生徒が運動の楽しさを実感し、創造性が高まるような教材・教具の工夫。グループやペア学習を効果的に活用し、課題解決に向けた協働的な取組。課題解決に向けて試行錯誤を重ね、没頭しながら取り組むことができる発問の工夫。

ウ 「主体的に課題に取り組める授業」の工夫

学習カードの記述、仲間との協働的な学習場面における観察、ICT 機器を活用し、生徒の表現活動の記録や成果物の分析、授業への取り組む姿勢や態度などを活用した評価方法や評価規準の作成。失敗を恐れず、挑戦しようとする取り組みの雰囲気づくり。

7 参考・引用文献

- 文部科学省「中学校学習指導要領」 日本文教出版(2008)
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版(2008)
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版(2017)
- 山梨大学教育学部附属中学校 2020・21 年 3 月 研究紀要

